

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 牧田 久美 |
| 学位の種類 | 博士（美術） |
| 学位記番号 | 第106号 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 論文題目 | 日本のテキスタイルプリントデザイン黎明期の諸問題 —GHQのデザイン育成政策を中心に— |
| 審査委員 | 主査 准教授 深谷 訓子 教授 吉田 雅子 教授 滝口 洋子 宮島 久雄（元国立国際美術館館長） 平野 恭平（神戸大学大学院准教授） |

論文の要旨

日本のテキスタイルプリントデザインは、占領期という特異な背景のもと、戦後経済復興の基幹産業となった繊維業界の中で黎明の時を持った。本研究では終戦直後から1950年代半ばまで、その黎明期から隆盛に向かうまでの経緯を追う。特に注目するのは、敗戦という未曾有の混乱の中で、占領を契機とした異文化間あるいは国内的和洋の相克、また伝統と革新との対立や融合の事実と、その様相である。

まず第1部では、戦前に不要不急産業として規制され、敗戦時には壊滅的な被害を被った日本の繊維産業が、平和産業として復興をめざす経緯を、GHQの繊維輸出振興政策から見ていく。数多の困難のなか結果的には大きな成功を掴む過程で、伝統的な日本の繊維産業あるいは意匠デザインがどのように揺らぎ、新たに変容していったのか、その経緯を分析する。

第1章では、占領直後から企画された生糸・絹製品の輸出繊維政策を取り上げる。戦前から世界的に定評があったため大きな期待をもって開始された絹の輸出は予想に反してなかなか進展を見せなかった。低迷する絹貿易や山積する滞貨に対し、米国の関係各省庁やGHQは多くの施策を試みるが、これらの中に、戦後のプリントデザイン誕生に深い影響を与えたGHQ主導の『染織図案サンプルブック』の制作がある。これこそ図案家復興の原点だったと回顧されるものだが、こうした企画の具体的な狙いや経緯は、今ではあまり語られることもなく、関係資料も極めて少ない。本研究では今回発見したGHQ側の新資料を含め、日米双方の資料を解析し、具体的な経緯の実証を行ってプリントデザイン黎明期の出発点の解明をここで試みる。

第2章では、戦中戦後、壊滅的な打撃を受けた綿産業がいかにして日本経済復興を担う基幹産業へと成長していったかという問題を扱う。

絹貿易の失速により本格化した綿の加工貿易は圧倒的な成功をおさめ、日本経済復興の主戦力となっていた。この経緯について経済史の分野で精緻な先行研究があるが、一方でデザイン的な視点からの研究は極めて少ない。この章ではGHQのデザイン育成的なアプローチがこの期の繊維産業の発展にどのような役割を担ったか、またこの産業の成功が黎明期のデザインにどのような影響を残したか、その両面を考察する。

第3章では日本の綿工業の戦後の再登場とその急激な進展が海外市場へ与えた大きな衝撃を考察し、国内繊維業界あるいはデザインへの影響を総括する。

この時期日本の輸出に規制をかける目的で結成された「英米合同綿織物使節」の来日は、非常に複雑な国際関係のなかにある、日本の綿産業の立場を浮き彫りにするものだった。この訪日グループの結成から来日実現までのいきさつを通して、当時の国際的繊維市場の複雑な背景を確認し、またGHQと日本繊維業界の周到な対応策や、日英米会議の具体的内容から、日本繊維産業が置かれた当時の状況や立場の理解を深める。

また当時発展の緒についていたプリントデザインに、加工貿易における指図図案が予期せぬ意匠盗用という疑惑を提起した。この意匠盗用問題に関して新出のGHQ関係資料から具体例を示して実態を検証し、その背景と将来への展開を明らかにする。

第1部ではGHQの深い関与によって発展した綿加工貿易、その問題の渦中から育ってきた戦後テキスタイルプリントデザインの萌芽を示し、次の第2部で語る図案家たちの活動を十全に理解していくための基盤となった社会的、経済的背景を明確にした。

第2部では、敗戦という特殊な状況下で、既存の文化がどのような変化を経て、新しい文化を受け入れ発展させていったかという問題を、国内向けプリントデザインにおける和洋の転換という視点から検討する。特に本研究では、今まで繊維業界の動向に埋没しがちだった染織図案家を中心に、繊維産業にとって最も重要といわれるデザイン面から復興の経緯を明らかにする。

まず第4章では、敗戦当初の複雑極まる状況ゆえに、今までほとんど研究対象に取り上げられなかった国内のプリント服地の芽生えを明解に考証する。これが業界の本格的復活の出発点と語り継がれている1949年の第一回京都染色見本市を機に、染織図案家あるいは大手呉服問屋や染工場が、服地専門への転換を目指すこととなるが、この章ではプリント服地市場がまさに誕生するその萌芽を把握する。

第5章では、服地市場の誕生を見た1950年から1952年、奔流のように押し寄せる洋風感覚に足をすくわれ、またその反動のように懐古趣味に走るという、極端に新旧に揺れる染織図案家の動揺の足跡を、マチス、ピカソらの西洋抽象絵画への極端な傾倒、あるいは光琳への復古に見る。プリントデザインの黎明期におけるこれら迷走の実際的な動向とその意義を検証する。

第6章では服地の爆発的な国内需要を背景に、やがて和洋兼業あるいは服地図案専門に転向する図案家も現れ、一時代を形成して、抽象や幾何柄の綿プリントが大きな飛躍を遂げていく展開を見る。

ここでは特に存在感を發揮した先駆的プリント服地図案家グループ「A」（エース）の活躍について考察を深める。彼らはいかにして革新的に洋装への転換に成功したのか。彼らの作品や具体的な経歴あるいは聞き取り調査の実施でその実像を初めて明らかにする。

いよいよ緒を見たプリント図案もまだまだ西欧の模倣に終始したが、この状況下で本格的なオリジナルデザインへのアプローチが様々なところで研究・実験されていた事実も掘り起こす。

第7章ではGHQその他海外からの日本の伝統的な意匠への期待と積極的な働きかけの意義を確認しつつ、ようやくこれらにも応える形で、日本独自のテキスタイルプリントデザイン創成へと向かう図案家の挑戦を考察する。自国の伝統と向き合い、西洋的感覚も身に付けて、和洋双方からの飛躍を試みる彼らの思いは、1955年春の第10回日本染織図案家連盟展覧会のテーマ「非形象」に結実する。この「新しい創形」への試みは業界的にも予想以上の成果をもたらし、戦後テキスタイルプリントの代名詞となった京プリントを全盛期へと導いた。

長い伝統を持つ日本の意匠が敗戦、占領という形で突如中断され、新しく入ってきた西洋の服飾文化に翻弄されながらも、GHQの持続力を持ったデザイン育成政策を緒に、自らが持っていた特質を復活し開花させ、なおそれを止揚して新しく乗り越えていくという至難の技をこの時期の図案業界は成し遂げたようだ。本研究はこうした復興期の諸相を初めて明らかにするものである。

審査結果の要旨

牧田久美氏の博士論文は、戦後めざましい復興を遂げて、1950年代後半には未曾有の活況を呈することになる京都を中心としたテキスタイルプリントデザインの、戦後おおよそ10年間の実態を明らかにしたものである。扱う期間は1945年から1955年。これまで、当時の混乱や記録の散逸から、テキスタイルプリントデザインに関しては、いつ何が起こったのかという基本的な事実の整理さえ手つかずの部分が多い時代だが、占領政策に始まり、政治、産業、社会制度の変革が相次いだ時期でもあり、この間の事情は、当時を間接的にであれ知る人々と資料がまだかろうじて残る今、明らかにしておくべき重要な課題だと言える。そうしたなか、牧田氏は自身が図案家として活躍していたキャリアと人脈も活かし、戦後当時のことを知る関係者に聞き取り調査を重ねるほか、そうした聞き取りで浮上してきたGHQによるデザイン指導の実態を明らかにしようと、国会図書館、アメリカ・ワシントンの公文書館、関連企業の資料室などに赴き、意欲的な資料収集にあたり、本論文として結実させた。

論文は2部構成を取り、第1部は主として1940年代のGHQのデザイン育成政策に関する内容、第2部は、内地向け需要が中心になり、図案家たちが自由な活動をできるようになった1950年代前半の事柄を扱う。

先述のとおり、本博士論文の課題には、先行研究が極めて少なく、1945年からの10年間の実態をある程度明らかにするだけでも、十分にその学術的貢献が認められる。しかし牧田氏がもたらした新知見は、そうした先行研究の少なさを補うというレベルを超えて、意義あるものと評価できる。なかでも重要な新知見はとりわけ第1部に認められる。彼女の調査の結果、GHQが時には本国の繊維産業を向こうに回すことすら厭わず、あるいは日本の綿産業に対する規制を求めて来日した英米綿使節団（コットンボード）にも巧みに対応して、いち早い借款の返済を目指して日本の繊維輸出をサポートしたという事実が具体的に明らかにされた。さらにこうした政策史の視点にとどまらず、言い換えれば経済学の関心事としての数量化できる製品（糸・布）の段階にとどまらず、それを生み出す過程にあったデザイン育成のプログラムの詳細を明らかにしてみせたことは顕著な貢献であると評価できる。

第2部では、そのようなGHQの支援もあって活動を軌道に乗せた日本の図案家たちが、洋装が主流となった衣裳習慣に如何に適合し、どのように試行錯誤を重ねていったのかということ明らかにしている。ここでは、当時の染織雑誌や関連企業の社史、あるいは聞き取り調査などから、主に1949年頃から1955年までの流行の推移を追いかけつつ、図案家たちの動きが年代順で記述されていく。着姿がイメージしやすい平面的な和装から、シルエットのバリエーションも無限で柄がリピートされる洋装へと根本的にデザイン感覚を刷新していく必要があるなかで、図案家たちが、時として伝統に回帰し、また時として欧米の抽象絵画などを取り入れて応用しながら、自由闊達なデザインをものにしていくまでの流れが、企業との関連や、デザイナーたちからの要望などにも目配りしつつ、生き生きと描き出されている。最終的に和洋双方の新たな感覚をもったオリジナルのデザインがみられるようになり、京プリントの全盛期へつながっていく展開を活写し得たのは、自身も図案家としての教育を経験している牧田氏ならではの視点によるところも大きい。

このように、第1部では主として産業政策史や経済史、第2部ではデザイン史の観点から戦後10年間を追っているが、一見したところ別の領域の問題に見えるこの第1部、第2部を架橋し、その必然的な結びつきを示しているのが、GHQによるデザイン育成政策とそれを受けて飛躍を遂げた京都の図案家たちによる新感覚の追求であり、この領域横断的な構成自体も、本論文の意義のひとつであろうと思われる。

このように極めて意義の大きな本論文ではあるが、産業政策史、あるいは経済史のこれまでの研究状況を適切に紹介して、自身の新知見を読者に明確に示すという態度は、牧田氏の論文にはやや欠如しており、その点が惜まれる。また、扱っている情報量が膨大なこともあり、ときおり、本人が自明だと思っている造形的な特徴については、踏み込んだ説明がないまま図版だけを上げて話が推移してしまう点も見受けられる。

とはいえ、牧田氏の博士論文には上述のように特筆すべき新知見が数多くあり、戦後日本のテキスタイルプリントデザインのことを初めて本格的に解き明かした労作であるといえる。今後この時代の日本のテキスタイルプリントデザインのことを扱う際には必ず参照されるであろう基盤的な研究と位置づけられる。こうしたことから、本学の博士論文として優れた水準を満たすものと判断された。